

歌物語の世界 : 伊勢物語七, 八, 九段をめぐって

阪下, 圭八 / SAKASHITA, Keihachi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

8

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

1966-11-26

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019162>

歌物語の世界

—伊勢物語七、八、九段をめぐって—

阪下圭八

はじめに

伊勢物語が古今集との密接なつながりのもとに形成されたとするのは、こんにちの定説であるといつてよい。古今集所載の業平歌は、そのすべてが伊勢物語にみいだせるわけだし、その他の古今集の歌で伊勢物語にもあらわれているものがすくなくないからである。とくに、古今集の業平歌にしばしばともなわれている比較的長文の詞書が、これと対応する伊勢の章段の物語地といちじるしく類似するという点は、両者の親縁関係を物語っている。

そこで古くから、ひとつの成立問題として、伊勢と古今との先後ということかが問われているのだが、ここでとりあげようとするのはそのことではない。たしかに両者を比べたばあいほとんどその表現は共通しており、一方が他に拠ったという継承・本末を想定したくなるのではあるが、しかし注意したいことは、字句のはなはだし類似にもかかわらず、それぞれが提示している文学の世界はかなり異質なものだ、という点である。古今集業平歌においては、いか

に長文の詞書が附されようとやはりそれは歌のわくの中のものであり、伊勢物語ではいかに短少な詞書程度のものであろうとそこには「歌物語」の世界が現前していると思われる。つまり両者の間には、継承、持続の側面と同時に文学としての方法・精神において飛躍と断絶の面があるとみたいのである。すくなくとも、伊勢物語の文学方法が、業平歌と同質のものであったとすれば、あのようにゆたかな歌物語の世界は、美しい素朴な愛のあり方を示す民間口碑をも吸収し、なお総体が昔男の一代記として構成されるということには、あらわれえなかつたであろう。

ということとはつまり、古今集業平歌とそれに見合う伊勢物語の章段との間に、伊勢物語を生成・展開させてゆく核心的なものがひそんでいことになるわけであり、それは古今が先か伊勢が先かということとは区別される、文学上の問題なのである。そこで、私は、両者の文学方法をあらためて比較検討し、その中から歌物語とはなにかということ、そして伊勢物語の多彩な段々を誘致・牽引した原形的なもののある方を探りだしたいと考える。とくにここに七、

八、九段をえらびだしたのは、古今集との親縁はもちろんだが、これらが素材の上でのまとまりをもった段々でありながらそこには歌物語と歌物語以前、さらに歌物語以後ともいうべき型態が併存され、そのことにもなつて主人公、昔男の像もずれてきていゝう点が、全段の姿を集約して示すものと思われるからである。

(伊勢物語の本文は、三条西家旧蔵の定家本により、適宜假名を漢字にあらためた。古今集は日本古典文学大系、後撰集は後撰和歌集総索引所収天福本の本文によつた。)

一

昔、男ありけり、京にありわびて、あづまに行きけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらをゆくに、浪のいとしろくたつをみて、いとどしく過ぎゆくかたの恋ひしきにうらやましくもかへる浪かな

となむよめりける。

(七段)

この七段は、昔男の東下り物語の最初に位置する段であり、古今集とのつながりはないが、歌は後撰集卷十九羈旅にある業平歌と同一である。そして物語地と詞書もつぎのようによく似ている。

東へまかりけるに、過ぎぬる方恋しくおぼえけるほどに、河を渡りけるに、波の立ちけるを見て

業平朝臣

いとどしくすぎゆくかたの恋しきにうらやましくもかへる波かな

(後撰集)

両者の比較からまずいえるのは、七段には「京にありわびて、あづまに行きけるに」とこの旅の動機が示されているのに対し、後撰集では全く無限定な旅となつてゐることである。「京にありわび

て」の旅であるだけにいっそうそこでは「かへる浪」への羨望が切実なものになつてくるといふ、地と歌とのよびかけあう関係が伊勢にはあるのだが、後撰集にはそうした呼応が詞書と歌の間にみいだせないのである。また、歌の背景となる場所も「伊勢、尾張のあはひの海づらをゆくに」、「河を渡りけるに」と相違しており、一方が、当時畿内より東行するものにおそらく深い印象を与えたであろう地点をとらえ、視野もひろく旅の心にふさわしい映像を示しているのに対し、他方は、情緒的喚起力を全くもたない散文的措辞にとどまつている。さらに「浪のいとしろくたつを見て」と「波の立ちけるを見て」とでは、イメージの具体性という点で格段の差があるであろう。

さて以上によつて、歌物語の地と歌の詞書との質のちがいをたしかめることができる。伊勢七段には、簡潔だが鮮明なひとつの世界の提示があり、おぼろげながら生活を背負った人間の姿がある。「京にありわびて」はこの男の過去を暗示し、「かへる浪」を羨む心からは旅の行末さえ予想することができよう。「伊勢、尾張のあはひの海づら」「浪のいとしろくたつ……」は、そうした男をいわば生かしはたらかしめる世界ないし状況としてあらわれているのだ。後撰集にはこのような人間や世界はない、それらは、詞書一般がそうであるように、「業平朝臣」なる現実の人間としての作者に、また歌そのものに依存させるからであつて、ここでもしよせん詞書は歌の理解のための補助手段にすぎず、文学的価値にかかわるものをつくりだしてはいないのである。

ところで歌物語において重要なことは、地と歌とのこだましあう関係であり、右のような伊勢七段の状況の限定・具体化によつて、

歌そのものの質が、後撰集とはちがった色あいをおびてくる点を見る必要がある。後撰集では詞書に「過ぎぬるかた恋しくおぼえけるほどに」とあるが、これは明らかに歌の前半「いとどしくすぎゆくかたの恋しきに」と重複する。たんに過剰な表現だということにどまらず、歌の情緒を詞書が先取りしてしまうことによって、この歌の中心的な感情である「過去の世界への思い」を力よわいものにしていくことは否めまい。その結果、歌の重心はセカンドハンドとなつた前半よりも、後半「うらやましくもかへる波かな」に移行し、要するに「かへる波」と都へ帰りたく思う心とを知的につなぎあわせた、それだけの歌としてあらわれている。しかし七段においては、くりかえしになるが、京にありわびての東下り↓伊勢・尾張の間の海辺↓白くたつ浪という状況のつみ重ねをへて、そこではじめて絶ちがたい過去の世界への思いが歌となつて噴出するのである。(塗籠本ではこのあたり「浪のいと白くたちかへるを見て、おもふことなきならねば」となっているが、改悪というべきだ。これでは歌物語から退後し、詞書にもどってしまう。)

七段での「いとどしく……」の歌は、物語地によってうたわれた状況が限定・特殊化されながら、同時につみ重ねられた状況を、一挙に情緒的に集約しそして解放するという機能を示すものであった。それは、後撰集のよりも、はるかに具体的に切実な人間の内面としてあらわれており、歌自体の文学性が見事に更新されたとせねばならない。つまりそうした更新は、物語地が歌の従属物に甘んずるのでなく、歌のおよびえない世界・人間を提示することによって生ずる、両者の交響の所産としてよいであろう。伊勢物語七段は、短章ながら優に歌物語的世界を確保しているのである。

昔、男有けり、京や住みうかりけん、あづまの方にゆきて住み所もとむとて、ともとする人ひとりふたりしてゆきけり、信濃の国浅間の嶽に煙のたつを見て、

信濃なる浅間の嶽にたつ煙をちこち人の見やほとがめぬ

(八段)

八段は、すでにみてきた七段と比べると、質の下落の印象はまぬがれがたい。第一に、「京や住みうかりけん」という東下りのモチーフは、一見、七段の「京にありわびて」と似ているようだが、しかしそれが推量語法であることによって、モチーフはあいまい化され、ここでの旅に流離感を失わせている。そのために、つづく「あづまの方にゆきて住み所もとむ」というところも、「ともとする人ひとりふたりしてゆきけり」という部分も、状況の展開として生かされず説明に墮してしまふのである。「信濃の国、浅間の嶽に煙のたつを見て」は、歌の前半をなぞつたにすぎず、総じて平板で取柄のない措辞というべきであろう。

鎌田正憲は八段にかんし、「蓋し此の段「東の方にゆきて云々」のはし書あり、次の段「あづまのかたに住べき国云々」のはし書に似たれば例の同類物語として後人のここに編み入れしなるべし」(考証伊勢物語詳解、傍点原文)としているが、そうにちがいない。この段は九段に随伴することで辛うじてその意味がみとめられる存在にすぎず、自立した文学性をほとんどたないからである。おそらくそれは、ひとつの道中記的興味から東国の風物をよんだ歌ととりあわせ一段として加したのだから、そうした関心のもとでは、もはや歌物語をはぐくむことはできなかつた、といつてよい。

昔、男ありけり、その男、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらず、あづまの方に住むべきくにもとめにとてゆきけり、もとより友とする人ひとりふたりしていきけり、道知れる人もなくてまどひいきけり、三河の国、八つ橋といふ所にいたりぬ、そこを八つ橋といひけるは、水ゆく河のくも手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八つ橋といひける、その沢のほとりに降りゐて、かれいひくひけり、その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり、それを見てある人のいはく、かきつばたいう五文字を句のかみにすへて旅の心をよめ、といひければよめる、

唐衣きつなれにし妻しあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふとよめりければ、みな人、かれいひの上になみだ落してほとびにけり

ゆきゆきて、駿河の国にいたりぬ、宇津の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、蔦かえではしげり、物心ほそく、すずろなる目を見ることと思ふに、修行者あひたり、かかる道はいかにかいまするといふを見れば、見し人なりけり、京にその人の御もとにとて、文かきてつく、

駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いとしろうふれり

時しらぬ山はふじのねいつとてか鹿子まだらにゆきのふるらん

その山はここにたとへば、比叡の山をはたちばかり重ねあげた

らんほどして、なりは塩尻のやうになんありける

猶ゆきゆきて、武蔵の国と下総の国との中に、いとおほきなる河あり、それをすみだ河といふ、その河のほとりにむれゐておもひやれば、限りなく遠くもきにけるかなとわびあへるに、渡守、はや舟にのれ日も暮れぬといふに、のりて渡らんとするに、みな人わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さる折しも、白き鳥のはしとあしと赤き、鴨の大ききなる、水の上に遊びつつ魚をくふ、京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず、渡守に問ひければ、これなん宮こどりといふを聞きて、

名にし負はばいざこと問はむ宮こ鳥わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟こぞりてなきにけり。

(九段)

このあまりにも有名な九段は、長段でもあり、集成されて一段とされたものもあるので、やはりそれぞれ一首の歌をふくむ四つの段落にかけて考えるのがよいと思う。まず唐衣の段については、古今集巻九鬪旅の業平歌との比較が必要になる。

あづまの方へ、ともとする人ひとりふたりいざなひていきけり。みかはのくにやつはしといふ所にいたれりけるに、その河のほとりに、かきつばた、いとおもしろくさけりけるをみて、木のかげにおりゐて、かきつばたといふいつもじをくのかしらにすゑて、たびの心をよまんとてよめる 在原業平朝臣
からころもきつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞおもふ

七段のところであつたことがここでも指摘できる。在原業平の東国への旅が実際にどのようなものであつたか知るよしもないのだ

が、古今集詞書にみられるそれはいささか遊樂的な趣を呈している。「ともとする人ひとりふたり、いざなひていきける」という発端、ついで「いとおもしろくさけりける」杜若をいい、そしてこの杜若を折りこんだ歌でしめくられるその雰囲気は、明るく気が利いたものといえよう。しかし、九段では「その男、身をえうなき物に……」と語られるモチーフによって、旅に憂愁のかげりが色こくおとされるのだ。東下りのモチーフも七段のそれよりは、もっとつきつめたものを感じさせるであろう。「身をえうなき物に思ひなし、京にはあらし、あづまの方に住むべきくにもとめに……」という表現は、「京にありわびて、あづまにいきけるに……」と比べて、より意志的、主体的な旅への姿勢を示し、そのことが九段全体に独自の緊張をみなぎらせるのである。「道知れる人もなくてまどひいきけり」はそうした旅の異常さを端的に語っている。

さて以上の部分について伊勢物語は、三河の国の「八つ橋」なる地名の所以をのべる形でそのあたりの情景をうつすのだが、これは古今集にはない部分である。こまかくみてゆけば、古今集が「三河の国八橋といふ所にいたれりけるに、その河のほとりに……」と文が連続しているのに対し、伊勢は「……八つ橋といふ所にいたりぬ」といったん終止させた上で、「そこを八つ橋といひけるは……」と次の文をおこしているところから問題となろう。つまり古今において、「三河の国八橋」とは杜若がいと面白く咲いていたその場所すぎないのであって、その意識が杜若にまで連続する文体となつてあらわれる。しかし、伊勢においてのそれは、「道知れる人もなく」まどいつつや々とたどりついた「三河の国八つ橋」なのである。かれら旅人にとって、ゆくさきぎさきすべてが未知の世界にほか

ならなかった。「くもで」に流れる河に橋を八つ渡したというこの光景は、かれらに異域にさすらう感をふかめさせたものであったはずで、伊勢の描写は、そうした流離の人々の内面にそくして出てきていることが注意されねばならない。そのあと伊勢は、やはり古今にはない「かれいひ」のことを記す。これは歌のあとの「……なみだ落してほとびにけり」の伏線ともなるのだが、いずれにしても伊勢ではこうした叙述の間に、杜若の比重が、古今に比してずっと軽くなっているとみられる。つまりそうすることで、「かきつばた」の歌の趣を微妙に修正しているのである。

「かきつばた……」の歌が機智より出た作であることはいうまでもない。「はるばる」が衣を張るに、「来ぬる」が着ぬるにかけられるといったぐあいには、技巧も手がこんでいる。古今の詞書はそのような歌の知的味わいをおし出すためのしかけであるようにみえる。「たびの心をよまん」とはあるけれど、しかしその旅は、友を誘つての東行、八つ橋の杜若という叙述からはきわめて一般的なものとしか印象されないからである。伊勢にあっては、右にみてきた物語地の総体が漂泊する旅人の世界としてあらわれ、それがつよく歌に波及する。すなわち、機智よりも抒情に、景物としての杜若よりもはるけき旅の実感に傾斜した歌がここに現前してくるのだ。「とよめりければ、みな人、かれいひの上になみだ落してほとびにけり」とする歌の後文は、人々の共感が何にむけられていたか、を示すものと、いわねばならない。

ところで人々の共感という点に関していえば、伊勢が「それ（杜若）を見てある人のいはく、かきつばたという五文字を句のかみにすへて旅の心をよめ、といひければよめる」のように、歌が人々

との対話的關係の中から発想されていることも、重要なちがい目となろう。総じて伊勢では、昔男とその「もとより（古くからのという意にとりたい）友とする人一人二人」からなる、親しい仲間の雰囲気がでており、それが最後までつらぬかれるのだが、古今集は詞書のはじめに友のことをいいながら、しかし結局は業平が孤独に歌をよむ格好となっている。歌が個人に帰属することは自明だとしても、それを人々の共通の心の表現として拡大させてゆくことは、古今では志向されていない。ここにも、歌物語と詞書および歌との文学上の落差を見ることができはるはずである。

物語は「善きも悪しきも、世に経る人のありさま」を、「この世のほかのことならぬをかきしるす」とは、源氏物語瑩卷にいう物語の規定であるが、伊勢九段はそうした「世に経る人」の世界に確実に近づいていつている。歌を業平朝臣という個人のわくから解放し、その抒情性を流離の姿で「世に経る」人々の心情におしひろげること、ここに歌物語のみが果しえた独自の創造の実体がある。「かれいひ」が涙にほとびたという、くだりにしても、それは闕疑抄のいうように「俳諧」の気味をもつが、同時に「かれいひ」が「世に経る」人々の「生活」をうかびあがらせる方向にはたらいっていることが見逃がされてはならないだろう。

つぎの段落は「駿河なる宇津の山辺の……」の歌をふくむところだが、この歌は、忠岑集の「するがなる宇津の山辺のうつつにも夢にも君を見てややみなむ」、古今六帖の「音にきくうつつの山べのうつつにも夢にも見ぬに人の恋しき」と類歌関係にたつ。古意は六帖歌を元歌だとして、六帖歌が「此一二の句はまうけてただ序にいひ

たる此文にはうつつの山路の有さまを詞に書てさて其処にてよめる歌としたれば上は今越る山のありさまをいひて即席として下の意をいひくだせる体となりぬ」という。いずれが先後かは別として、他が宇津の山を序とした恋歌であるのに対し、伊勢は霧旅の歌となっているのはたしかである。都はなれた駿河宇津の山辺での感懐とすることによって、「うつつにも夢にも」の句が類句でありながら、ここでは深い真実感を帯び、あはぬなりけり」の「いひつめた」（直解）表現を自然なものとしている。それというのも、「ゆきゆきて、駿河の国にいたりぬ」と文をおこし、物心ぼそい宇津の山あたりを叙する物語地が、歌の抒情を方向づけ、増幅しているからだとしたい。

ところで、この段落での蔦かえでが生いしげる暗い小径をたどろうとする旅の有様は、旅の寂寥感をにじみ出している点で、日本文学の歴史の中で嚆矢に位するかもしれない。だがそれは、単に経験にもとづくといったものではないようだ。ここにみられる自然の中の孤独感、図式的にいえば、社会体制から分離しつつある個人が、裸の自己をもって自然とあい対してみいだした歴史的映像と考えてよいのではなからうか。ほかならぬ伊勢物語の東下りの段にこうした新しい自然の姿がとらえられたということは、歌物語が、歌からのおのずからな成長線上にあらわれたのではなく、その間に精神構造の上でのかなりの変動を必要とした事情を語っているようである。（この点はさらに後述したい。）

富士の山の段落については、文学的には、八段「信濃なる……」とほとんど同じ平面のものといえる。東下りの道中をつなげてゆく

興味からの挿入であり、歌物語としての感興はないからである。ただ後人の手になるものではあるが、富士の姿を「塩尻」のようだとはいっているのが注意される。「塩尻」は都の貴紳のあざかりしらぬ俗語であったろうから、伊勢注釈史の初期から語義があげつらわれることになった次第だが、民間口碑の吸収という事態とあわせて、伊勢の示す地平は意外にひろくひろがっていることがここからも知られるのではあるまいか。

例によって、比較のために「都鳥」の段落に相当する古今集の業平歌を左に掲げる。

むさしのくにと、しもつふさのくにとの中にある、すみだがはのほとりにいたりて、みやこのいとこひしうおほえければ、しほし河のほとりにおりて、思ひやればかぎりなくとをくもきにける哉と思ひわびて、ながめをるに、わたしもり、はや舟にのれ、日もくれぬといひければ、舟にのりてわたらんとするに、みな人ものわびしくて、京におもふ人なくしもあらず、さるおりに、しろきとりの、はしとあしとあかき、川のほとりにあそびけり。京にはみえぬとりなりければ、みな人みしらず、わたしもりにこれはなにどりぞととひければ、これなん宮ごどりといひけるをききてよめる

業平朝臣

名にしおはばいざこととはむ宮ごどりわが思ふ人は有りやなしやと

みられるとおり、伊勢物語と古今集との字句上の差異はまことに微少である。九段の第一段落が古今詞書の倍近い字数となっているのとは対照的だが、ひとつには「名にし負はば……」の業平歌が、

直截に都恋しさをうたった喚起力のつよい歌だということに起因しよう。

ただしかし、字句上の出入りがすくないことは文学としての同質性にはつながらぬ。微少な差の中で伊勢は歌物語の世界を提示するのである。たとえば詞書の「むさしのくにと、しもつふさのくにとの中にある、すみだがはのほとりにいたりて」は、物語では「猶ゆきゆきて武蔵の国と下総の国との中にいと、おほきなる河あり、それをすみだ河といふ」となっている。ここの傍点を付した部分の措辞について、直解は「この川をこしてはいよいよ故郷遠くなるべしと思へる心有り」といい、さらに古意は「大きな河といへるは旅のわびしさをます文也てふ説はよし。京人のかかる東国に来て猶此河をわたりてしらぬかたへゆかんずる心おもひやるべし」という。いずれもたしかな読みというべきだろう。すでに「唐衣」の段の「八つ橋」についてのべたことと同じだが、伊勢物語は漂泊者の内面にそうすることによって、角田川をたんに指示するだけでなく映像として示しているのである。さらに、詞書の右につづく部分、「みやこのいとこひしうおほえければ」は、先に七段と比べた後撰集詞書の「過ぎぬる方恋しくおほえけるほどに」と同様な文学的にはマイナスの役割しか果たしていない。ここの詞書は長文だから「名に負はば……」の情緒を先取りするほどのはたらきはしていないが、しかしこれが東国河畔での物思いを「都」に限定し矮小化してしまっていることは事実だ。伊勢のばあい、ここは「その河のほとりにむれるておもひやれば、限りもなく遠くもきにけるかな……」とつづくのであり、そこで思いやることの内容は、かなり複雑なひろがりをもつことが文脈から暗示される。いとほきなる河を前にして、さ

らにそれをこえてゆこうとしている旅人の思いは都の一点にのみ集中するのではなく、これからの旅の行先にも及ぶものであったろう。伊勢物語は多言を要せずしてそうした気味あいをとらえていると思う。

右にのべたことは、別ないい方をすれば、伊勢の「名にし負はば……」の歌が、古今にはみられないひろさと深さをそなえた世界を集約しているということになる。その点については、つぎのような差異がとりあげられてよい。

〔古今〕かぎりなくとをくもきにける哉と思ひわびて、ながめをるに、

〔伊勢〕限りなく遠くもきにけるかなとわびあへるに、

〔古今〕さるおりにしろきとりのほしとあしとあかき、川のほとりにあそびけり。

〔伊勢〕さる折しも、白き鳥のはしとあしと赤き、鳴の大きさに、水の上に遊びつつ魚をくふ

「わびあへるに」は、昔男と同志同行する人々の姿をとらえている。「もとより友とする人ひとりふたりした……道知れる人もなくてまどひいきけり」という九段冒頭の文意にそくした表現にほかならない。また、都鳥については、その大きさや魚をくうさままでのべ、より生きた対象としてとりだしているのだが、それは「名にし負はば」の歌に真実、都鳥に問いかけてゆく語気をつよめる方向にはたらいている。古今集においては、都鳥に事問うのはひとつのポーズを感じさせる。都鳥はその実体においてではなくその名において都をしのばせるよすがなのであり、そこから「見立て」としての事問が出てくるとみてよいであろう。もちろん、すべて「見立て」

に解消してしまうのは正しくないとしても、古今集では、詞書と歌とが「これなん都鳥といひけるを聞きてよめる」というように、都鳥・歌の間に多少ながら間があり、その間が歌をひとひねりするといった印象をあたえたるのである。伊勢はその点、「これなん宮こどりといふを聞きて」とまさにすばやく歌が連結される。そのすばやさが、そして前述の都鳥の対象化が、歌に真実の問いかけの色あいを帯びさせるのだ。つまりそれは、「……いとどしく物がなしきをりから此鳥の名を聞いていと切てよみ出たる心のほどのかなしさいはんかたなし。かく不賢おもふ事をよむぞ極めて切なるわざなる」（古意、傍点引用者）とよめるのだが、そうした歌の「をさなさ」と対応して「とよめりければ、舟こそりて泣きにけり」という部分が、何ら誇張を感じさせぬ共感の情景としてあらわれてくるのである。歌物語における歌と物語地とのかかわりありは、本質的なあり方においては、地の文による歌の醇化をめざすといつてよいと思う。物語地は単にうたわれた状況を限定・具体化するだけでなく、そうすることによって、歌に醇化作用を及ぼしてゆく。歌は歌物語の中へ位置づけられることで、その機知や技巧や見立てといった外皮が洗い落とされ、自然で素朴な情緒が回復される。「名にし負はば……」の歌は伊勢において、そのおさないしかし至純の姿をとりもどすのであり、またそうした姿によって同時にそれは、昔男に同志同行する人々はもちろん、舟中すべての人の心を集約しそして解放するのだ。つまり、歌は個人の表現であることをこえて、より普遍的な抒情性を獲得するにいたるのである。

すでにみてきた伊勢物語の七段および九段は、そうした歌物語の本質的なあり方を見事に示したものだといえよう。

三

伊勢物語において歌物語が誕生したということ、そして伊勢物語は業平の文学を起点としたということは、実は歌物語なるジャンルが業平という存在に負うところ大きいことを意味している。それと関連して、伊勢物語の生成ないし成長はかなりの期間にわたったけれど、文学としての歌物語はきわめて短期間の産物であったとも考えられよう。いまここで検討したわずかな数段の中にも、歌物語の實質を失った、残骸のごとき章段があり、歌物語は伊勢にはじまり伊勢に終る、といえるくらいである。分析は他の機会にゆずらねばならないが、大和といひ平仲といひあるいは篁物語といひ、それらは歌物語という点で伊勢の墨を摩すものとはならなかった。それらは、歌物語以前としての私家集、歌語りの領域に、あるいは歌物語以後ともいべき説話、日記の領分に傾斜しているからである。

いったい歌物語を支える条件に、何が必要であったのだろうか。私は、歌物語のめざすものとして、物語地による歌の醇化ということとをあげたが、それは歌がそのままの姿では本来の抒情性を喪失せざるをえないような時点、歌が公儀の晴れの文学として聖化され、知的・技巧的に再編されてくる過程、同時にその一方であらたな散文の文学への胎動が都市貴族の意識の中におこりつつあった、そういう文学史的・精神的時点でのみ実現されうる一回的な志向ではなかったかと思われる。抒情の回復はもはや素手では望むことができず、むしろ社会矛盾の中でめざめはじめた散文的意識ないし批評的精神のみが、歌の抒情性を再認識し再構成しえたのではなかったらうか。

ふたたび伊勢物語にかえっていえば、九段における歌の醇化が、昔男をはじめとする一行の流離の旅という文脈の中で達成されていることが注意される。昔男の東国行が「身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじ……」という主体的決断にはじまり、しかもそれに同ずる人々をとらえ、歌を人々の共通の憂悶の表現として位置づけているところには、きわめて暗示的であるにしてもなにごしかの反政治的・反貴族的気分がただよっているとせねばならないであろう。そしてここに、藤原摂関制という貴族社会の再編過程での多くの貴族層の落魄、それにとりまわす批判的・反省的潮流の形成といった事態をてらしあわせてもよい。もちろん、政治的社会的現実の中の逃避行の構想は情緒的反抗の域を出ないが、しかしそうした反抗をバネとしてはじめて歌物語は開花しえた、ということ伊勢物語九段は象徴的に語っているのである。

この歌物語の形成の事情は、古今集撰者たちが知的・散文的意識をよりどころとして和歌を改鑄した事態と表裏をなすといえるかもしれない。しかし歌物語のばあいは、古今集が上向きに聖化されてゆくのは逆に、歌がなお生活の中に息づいている民間口碑の世界に開かれることによって、その多様さと豊かさが保障されたのであった。

(41・10・11)

(追記)この小論を書いたあとで、松原寿子氏「伊勢物語の研究―古今集との対照による考察(学習院大学国語国文学会誌8号、昭和40年3月)」という論文があるのを知った。論のたて方、検討のすめ方など小論とかなり共通しており、参考になる点がすくなくない。あわせよんでいただければ幸である。